［概要］

日本では 2003 年の「観光立国」宣言以来「ビジット・ジャパン・キャンペーン」や観光庁の設立などを皮切りに，様々な観光政策が始まった．一方，学問分野ではこうした社会状況が訪れる前から観光への注目が集まっていた. 観光に関する研究は社会学や地理学などで多く取り上げられ, 中でも観光地の形成過程や変容をテーマにしたものは主要な観光研究の一種とされている．本研究の目的は，1999 年から 2020 年までの立山黒部アルペンルート一帯の観光イメージの変遷を整理し, ガイドブックによって創出されたイメージと観光地の実像を比較・分析することである。そして，観光地としての立山黒部アルペンルートの成立が地域にどのような影響を与えたのかを明らかにすることにある．分析の結果，立山黒部アルペンルート一帯の観光イメージは自然探勝型の観光地として確立しており，細かい部分を除いて 22 年の間に大きな変化は見られなかった．社会的背景による考察では，立山黒部アルペンルートは平成に入って徐々に国内からの注目度を下げていた．特に 2011 年に起きた東日本大震災の影響で，入り込み人員数を大きく落としてしまった. しかし, 国外への広報活動が訪日客数の増加に繋がり，近年は回復傾向に向かっていた．また，観光地としての立山黒部アルペンルートの成立によって，地域に観光振興の糸口を与えたことが明らかとなった.

キーワード : 立山黒部アルペンルート，観光，イメージ，ガイドブック，テキスト分析